

記念誌「あゆみ」より

記念誌「あゆみ」によせて

P T A 会長 宮 城 照 明

吾等は一九五二年八月、八重山開拓先遣隊として、当地区に入植いたしました。当時の学校はと申しますと同年四月に開校したと云う在籍七名に先生は御一人で小学校一年生から六年生まで教えて居られました。入植当時一番悩んだのは開拓地からの学道がないこと、瓦葺一練一教室で余りにも小さい陰気な山の学校であった事でした。学道がない為、草の中を分けてゆっくり歩き朝は草木の枝葉に宿る露にびしょぬれになる始末でありました。我等は入植最初の作業として、急いで木を代り、草を払い、地を均して学道を開きました。家族入植に伴って在籍も四十余に激増したので校区民が力を合せて仮校舎を建てましたが暴風の為に倒れ、再び二教室を建て直したこともあります。私たち校区民は日頃何とかして富野分校を他の学校並に盛り育て子供らが安心して幸福に教育を受けることが出来るようにしたいものだと考えました。これが父兄否全校区民に与えられた使命であり、当然の責務であるとして強く念頭から離しませんでした。私の母校古堅小中学校は在籍千余名に職員は三十有余名、広々とした便利な場所に立派に学校は建てられています。この様な学校から不便も甚しい山の学校に然も生れたばかりの不備不完の小さい学校に通学する子供らが気の毒でありました。幸に子供らはこんな学校でも吾らの学びの

園だと不平も云わずおとなしく黙々と学業にいらしてました。その姿を見て父兄として何とも云えない感に打たれました。我ら P T A は心を合せ力を合せ苦しみを我慢して学校造りに毎年毎年頑張りました。運動場を見て下さい。校門、校舎、水道施設を見て下さい。図書その他を見て下さい、学校造林を見て下さい。これ皆会員の汗の結晶であります。僅々数年にして見違える程立派な学校になりました。子供の明るい顔を見て下さい。頑丈な体を見て下さい、すくすくと伸びる子を見るとき我ら親心はこれ以上に勝る幸福はないと思います。私達は学校創立五周年を記念する本年に銘記すべきことがあります。これは宿望だった分校が富野小中学校として完全独立をしたことでもあります。なお初代校長に本校創立当初からの育ての親であられる大田正吉先生をお迎え致すことの出来たことでもあります。独立富野校に大田校長先生、校区民は喜び万才を唱えたのであります。吾ら P T A 会員は悪条件下の避地教育に部落民と共に連携して教育道に御尽力なされる大田校長先生始め諸先生の御功績を讃え、何とお礼申し上げてよいやらわかりません。感激の念で一杯であります、月日は過ぎて我が校も創立五周年を迎えました。五周年を迎えるに当って、五周年記念事業を為すべきだとの校区民の熱意が燃え上り記念事業期成会を組織して事業計画をたて、その完遂に校区民は邁進いたしました。記念事業を完遂するに当って遠くは、母村読谷村、同村波平、楚辺部落会や同村出身の有志の方々や大田校長の盟友昭和自動車社長久保田盛宏様などから多大な労志を戴き、なお川平校区民の有志からも御同情と御援助がありまして誠に感謝感激に堪えません。校区の諸氏も我等の記念事業に対しては、全智を

発輝し、自由な立場で出来る限りの御協力を賜りました。このようにわしい心尽しに唯々感謝いたし敬意を表します。計画の記念事業も多角的に、実を結びまして会員や子供らと喜びを共にすることをこの上なく嬉しく思います。

なお、卒業生は進学率も百%で既に八重山農高卒業生二名を出し、現在同農高校に四名北部農高に一名の在学生在が居り、後輩を激励しています。その他の卒業生も模範青年になって、農事に精励し修養にも強励し部落発展の原動力となっています。誠に心強いことでもあります。回顧すれば、学道さえなかった学校が五力年の力強い歩みを続け現状にまで漕ぎつけ、創立五周年記念の盛典を挙げることの出来る喜びは何とも言えません。これ全く関係各方面からの物心両面にわたる御指導、御援助の賜と厚くお礼申し上げます。今後私共は一層学校教育に力を注ぎ、良校風をつくり各位の御高思の万分の一にも報いたい覚悟であります。今日の祝日に、我が富野校の歩みを省み校運の隆昌を祈りまして祝辞にかえます。

五ヶ年を省りみて

元富野部落会長 砂川茂太郎

富野校創立五周年記念式典に当り本校五ヶ年の歩みを記し心からお祝い申したい。私は元来梓海出身であるが日本帝国海軍現役

兵を振り出しに故郷を離れること十六年余、終戦で帰って見ればわが古里はマラリヤの為に荒れ果て廃村状態になっていた。一時は失望したが、故郷の復興を思い立ち勇気を振り起した。当時「とみの」に日本軍の引揚げた兵舎がありその兵舎を住居に利用して、五六戸が入植し裏石垣開拓に取組んだ。これが富野部落の始めである。私は一足おくれ一九五〇年梓海の復興を念じて入植した。入植当時は諸悪条件のもとで苦難や貧困と戦いながらも富野部落民の宿望は第一学校設置、第二道を開き交通の便を図ることであった。一九五二年元旦さゝやかな集いをもった部落民は本年こそ学校設置に総力を挙げることに誓い努力を払った。「天は自から助くる者を助く」。「たゞけさらば開かん」とか私達の学校設置の熱情は政府を動かした八重山群島政府は一九五二年二月二十五日川平小学校富野分校設置を認可された。私達部落民は夢かとはかり大いに喜び、歓声を挙げ当局の安里知事、宮城文教部長に心から感謝の意を表した。然し学校設置の喜びはやがて建設への苦難の道へと展開されて行かねばならなかったのである。いざ学校建築となると余りにも大きい難事に遭遇した――。

と云うのは交通不便な山間僻地の学校建築請負業者へ五万余に相当する労力ならび資材を提供することであった。学校は欲しいが十一戸の部落民にしては耐え難い負担であった。当時の部落会長砂川重雄氏はこの難題解決の為川平部落会川平青年会に対し絶大の援助を乞うた。川平部落会同青年会は心から同情し砂、砂利運搬その他の御協力を賜った。茲に記して感謝の意を表する次第である。部落民は海から資材の搬入、山から資材の取り出し、敷地の伐採、地均や建築雑役と一ヶ月余も家業を顧ることは出来な

った。校舎落成前私は後任部落会長となった。校舎は落成したもののこんな山間僻地の食糧事情も不安なこの学校にどなたを先生にお願いするかと云うことが次に来た難題であった。

一難去って又一難来るの状態であった。ところが天は我等部落民に幸を与え給うたのである。即ち当時八重山群島政府文教部社会教育課に大田正吉氏がおられたが氏は石垣小学校時代私と同級生であった。私は氏によい先生を文教部で世話して下さるようにと願い、なお遠慮なくよい先生の配置が困難なら是非あなたがこの学校の世話を見て呉れるようにと懇願した。氏は感ずるところあつて承知することであつたが最初は私も部落民も半信半疑であつた。四月になつても教員は赴任せずやはりこんな山間僻地には誰もきていただけなのかと思ひ、私達は不安と悲しみに打沈み対策を練っていた。そこへ大田先生がお見えになつて学校開校を四月二十九日にするということだったので部落民は夢かとはかり驚き大いに感謝感激した。この感激は一生忘れることの出来ないものである。四月二十九日の吉日富野分校開校式を挙行した。それから五星霜在籍全校七名、先生一名の学校から開校の一步をふみだした富野分校は現在独立校となり校運はいよいよ隆盛で現状にいたつたのである。これは梓海開拓団の入植による米原部落民と富野部落民が協力一致して、教育第一主義であらゆる艱難辛苦と斗いつつも教育を守り育てたことと、校長先生初め諸先生方の愛情満ち満ちた御精励の賜であり、同時に生徒諸君が開拓地学校としての「よい子」の自分を尽し、立派な校風を樹てるべく日々努力を怠らないからである。私達校区民は総力を結集して創立五周年記念事業の数々を遺し輝く学校の歴史を築いた。これから

後も更に一步強く前進し、私達の学校がますます発展することを祈りし学校創立五周年記念式典のお祝いのこととする。

母校の発展を祈る

第一回卒業生 富村光子

一九五二年十月三十日、政府計画第一回八重山開拓団の家族入植で梓海地区の海岸に上陸しました。十月二日に富野部落や開拓地を見て廻りました。その時、山の中に一軒の瓦ぶきが淋しく大木につつまれて建てられたのが不思議に思われました。あとで知ったことですが沖繩のにぎやかな大きい学校から来た私にはそれが学校だとは全く考えられませんでした。前の細い山道に立って民家にしてはめずらしい、そうかといつて学校にしては余りにも建物や庭が小さすぎると思ひながら明けて四日より富野分校に通学する事になり、先生に連れられて登校しました。昨日の不思議な瓦ぶきの前まで来て『こちらがこれから皆さんが勉強する学校です。』と先生にいわれて昨日の疑問は火に水をかけられる如くうち消されると同時に何となく淋しく涙がこぼれるばかりでした。間もなくかねの合図で教室に入り、二人の先生を前に二十七、八名の生徒が明日からの授業の事についてお話を聞きました。話を聞いていると淋しさと不安で胸がはちきれようない感じがして来ました。十坪位の庭を前にした一つの瓦ぶきが山の中に淋しく建

っている。これが学校だとはほんとに未だに考えられない位でした。当時の学校の姿を思い出し現在の堂々とした立派な姿と比べると何だか夢のような気がします。

道も木や草でおおわれ、青空をみることもできない暗い山道の草をかきわけかきわけ朝つゆにびしょぬれで通学しました。雨の日など川が大水となり、下級生をおぶって先生の手につかまってぬれて寒い思いをした事も度々ありました。胸がぞっとする程おそろしい悪条件の自然と戦いながらも、私達生徒は皆少しの病もなく通学し、小さい校庭で二人の先生と共に学び、また瓦ぶきの前に大きな木のかぶが二つ仲よく並んでいたがそれを遊び道具として元氣よく遊んだ。運動用具といっても何一つなく運動場といっても小さくて何かにつけて不自由な山の中の学校でありました。日中は生徒達が庭一ぱいに遊び夜になれば猪が出て来て庭一ぱいあばれ廻るような状態でした。このような山の中の小さい学校が日々に明るく姿を変えて行きました。父兄や部落民の力によってかやぶきの教室が建てられ小学生と中学生がやっと別々に勉強する事が出来、楽しい学校生活が始まりました。今までの淋しさは沖繩のさわがしい学習の場に比べて静かな学習の場と変わりました。今では小鳥の鳴き声もかえってはげましの楽しい音楽となつて聞くことが出来ました。このような楽しい学園でしっかり勉強しようと思った頃はも早三月、私にとっては三月といえ卒業、お別れという淋しい月でした。この楽しい学園と別れなければならぬかと思うと何となく緑の自然をにくまらずに居ません。何時までも何時までもこの楽しい学園で可愛い弟、妹たちと勉強したくなります。しかしそうは世の中は許してくれない。

卒業して社会人として、先輩として母校の発展のために励むより以外はないなどと思いながら楽しい学園を去って行きました。私達の卒業後も日々には発展して行きました。しかし自然は人間の血のにじむような努力をもとめせず折角建てられたかやぶきの教室も五月の台風でたおされて再び不自由な二部授業、木の下での授業へ逆もどりしてしまいました。そこで生徒たちは自分たちの手で先生方と共に力を合わせて形ばかりの仮小屋を建てて不自由な二部授業を取り去る事が出来ましたが、父兄や部落民はその涙ぐましい状態を見て再び仮校舎を建てる事に決定して着工いたしました。出来た仮校舎は前よりも強くて板壁の教室が建てられました。一九五四年の一月には中学校の分校設置が認可され川平小学校富野分校の名札が川平小中学校富野分校として発展の姿を見せました。私たちの母校は自然の悪条件と戦いつつ休む事なく発展しました。八月にはブロック建ての永久校舎建築が始められ、可愛い生徒たちをいいただいたすばらしいブロック建ての教室が一つ校庭に勇ましい姿を見せました。運動場も校庭当時の十数倍に広められて今では開校当時の生徒の遊び用具としてつかわれた木の根も姿を消してしまつて全く見違えるような校庭となりました。十月には富野分校第一回の大運動会を行う事が出来ました。運動場や生徒の数は他の大きい学校の比べ物にならないが生徒の技といふ元氣といひ決して他の大きい学校に勝る事はあつても劣りはしないと思われました。

その後水道が設けられおいしい清らかな水が校庭にあふれる程流れ出ました。その後石垣島一周道路が開通され今まで草をかきわけかきわけ、毎朝つゆにぬれて通学した道も今ではなつかしい思

い出の一つとして頭の中に残るのみです。一九五六年三月には二度目の永久校舎の建築が終り、二つのブロック建てが仲よく並んで堂々とした姿で生徒たちを保護しています。このように校庭には見事な校舎が建並ぶし運動場は年々広くなり教員数も、生徒数も増し、わずか五年そこらでこれ程見ちがえる程発展するとは夢にも思いませんでした。一九五七年四月には立派な校門と同時に富野小中学校の門札が新しい校門を一段と美しくかざってくれました。省りみれば短いような、長いような五年という年月を迎え、ここに五周年式典を持つ事の出来たことは第一回卒業生にとって、何ともいえない嬉しさと喜びで涙があふれるばかりです。最後に母校の発展をお祈りいたします。



